
キューピッドの鎖

阿見乃

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

キューピッドの鎖

【Nコード】

N7535J

【作者名】

阿見乃

【あらすじ】

愛し合う二人を結ぶ、それが彼女の仕事。「本当に愛し合っていますか？」でないと二人を縛り付ける鎖になる。棘のある鎖。秘密を持った彼女が巻き込まれる災難と、出会う人々の話。

その1（前書き）

拙い文章でお見苦しい点も数多くあると思いますが、どうぞよろしくお願い致します。

その1

白い鳩が青く晴れ渡った空に羽ばたく。

愛と平和の象徴。

私たちの周りで円を描いて飛び立ってゆく。

代わりに色とりどりの花弁が頭上から降ってくる。

白いドレス、それから手に持った薄桃色のブーケに赤や黄がかかる。

教会の鐘の音、周りの祝福の声。

この日を今までずっと夢みてきた。
ずっと。

ああ、私は今、世界で一番幸せ。

隣で優しくほほえむ彼がゆっくりと顔を近づけてくる。

目を閉じて、唇を合わせた。

さあ、永遠の誓いを。

そして、指輪を交換しよう。

その2

幾度となく結婚式を見守ってきた。

白い二人を結びつける。

それが私の仕事だった。

彼女は指輪の裏の名前を彫る事を生業とする彫り師である。

ついた通り名はアモル。

別名、恋のキューピッド。

曲がりなりにも性は女、だが、彼女に依頼をしに来たものは少年とも少女ともつかない格好に必ず尋ねる。

彼女も、そのときばかりは満面の笑みで

「男です」

それが何か？と言うのだ。

理由なんて特にない。

そっちの方が納得されやすいものだから。

また、地下にある彼女の仕事場の扉が開く。

指輪を持って誰かが来たようだ。

その3

ヒールの音が石造りの階段に響く。
揺れる蠟燭の火にあわせて揺れる自分の影。まるで牢屋のようだ。
降りた先には深緑の扉があった。

彫り師のアモル。

密かな噂になっっているのを偶然聞きつけた。居場所も知られていないアモルに、どうしても彫ってほしくて。
ついてきてくれた騎士に調べてほしいと頼み込んだ。渋々頷いたが、それでも調べるのに1ヶ月かかっていた。

ようやくここまで来たものの、未知の恐怖で立ち止まる。
こんな陰気な地下に住んでいるのだから、気味の悪い翁か、魔女か。
アモルは男性の名前なのだから、きっと男だろう。
よけいに扉を開けるのがためらわれた。

でも、わたしはあの方と幸せな夫婦になるのだから！

深呼吸をすると、付き添ってくれた騎士が心配そうな目を向けてきた。
た。

大丈夫、と言って、そのまま扉を開けた。

幸せの保証を欲しがる者がまたやってきた。
花嫁や花婿はどうしてあんなものが欲しいのか。
保証は偽りかもしれないというのに。

扉を開けたまま固まっているのはドレスを着た女性。

「ようこそ」

アモルが声をかけると、ようやく意識を戻す。

「あの、あなたが…」

「彫り師です」

え…と眩くなり再び固まっている。しかし今度は自力で戻った。

「まあ！あなたがアモルですのね！？わたくしてつきりもつとご年配の方だと思っていました」

高い声を上げながら一人で盛り上がっている女性の反応には慣れていた。

ゴブリンではなかったのね、などと言われたときさえある。いくら何でも空想上の生き物はないだろう。

それにしても、この女性はいったい何者だろう。驚くほど美しい顔に若草色の品の良いドレス。

華美ではないにしろ所々につけられた宝石類も、貴重なものだとわかる。洗練された身のこなしも育ちの良さが伺える。

無邪気な笑顔と純粹そうな目が眩しい。

「それでは、本題に入りましょう」

紙とペンを差し出す。

「ここに自分と相手の名前を」

ただし、と付け足す。

本当に結ばれたいと思う相手を。

少しでも迷いがあるなら引き受けることはできない。

心の中でつぶやく。なぜなら、私が施すのは呪いだから、と。

強い口調で言うアモルに、それまで女性の後ろで控えていた騎士が

物騒な目を向けてきた。

「一生愛しますわ。もちろんあの方も同じ気持ちですもの」
相手を全面に信賴して、裏切られることなんて考えもしないで。

その4

ペンを持つ細い指。職業柄どうしても荒れる自分の手とは作りが違
うんじゃないか、と思う。

というより、こんな美しい人と自分は同じ生物なのか？

さらに、すらすらと書かれた名前を見て驚く。

なんとまあ、王子様だなんて。

とすると…この人は王子の婚約者か。

戴冠式にあわせての結婚となるのだろう。

まあ、誰が客でも関係ない。

「では指輪を」

指輪だけ受け取るつもりだったのに、熱のこもった瞳で指輪を渡さ
れ、そのまま手まで握りしめられた。

「レイチエル様！！」

焦ったような声で騎士が呼ぶ。

「このような卑しい者に触れるなど」

全身で拒絶されているのが分かる。

「なんてことを言うのです！」レイチエルがたしなめてもまだ睨ん
できている。

少々カチンと来る。

目の前で卑しいと言われたら当然の反応だと思う。

「ふうん、卑しい私などとは口も聞きたくない、ですか？」

眼差しは肯定だ。

レイチエルはおろおろして泣きそうになっている。

少し意地悪したくなる。

「ここに来るまでにたくさんの人がいたでしょう。あなたの言う卑しい者も」

おそらくこの騎士は貴族だろう。

「あなたと彼ら、どこが違いましたか？手はあったでしょう。足は？耳は？目は？」

「身分がある。この身に流れる血が」

「彼らの血は緑でしょうか。黒でしょうか。私にはあなたたちの方がよっぽど血が通ってないのではないかと思います」

民から税をとる王族や貴族の方が。

ゆがんだ顔をして、今にも人を殺しそうだ。馬鹿にするな、と大声を発した。

「これはこれは失礼致しました」

別にアモルは身分制に反対しているわけではない。それは国を保つのに必要なことでもある。スラムの孤児を救いたいとも思っていない。

ただ、卑しいと罵倒する騎士や、それにもまして勝手に同情のまなざしを向けてくる綺麗なオヒメサマにイライラしたから。

思わず騎士に八つ当たりしてみただけ。

「そんなことより、レイチエル様、泣きそうですけど」

ぶるぶると震えていたレイチエルは大粒の涙を流し始めた。

焦る騎士はもう一度こちらを睨みつけるとレイチエルを外へと促した。

「こんな奴のところなど気分が悪い。はやく出ましょう」

アモルは素早く紙と指輪を騎士に押しつけ、勝手に出て行ってもらった。

壊れそうな音をして扉が閉まった。

完全に足音が聞こえなくなったところで、「あー、やっちゃったな
ー」

…自己嫌悪。

頭を抱えて机の下に潜る。

バカだ。どうしようもないくらい。

あのまま剣でスパツと切られてもおかしくなかった。

もしくは不敬罪でひつとらえられるとか。

アモルはうー、あー、と呻きながら『一歩間違えればなるところだった未来』に遠い目をした。

その5

サクリとかむと甘い果汁が口いっぱい広がる。赤い実は水分が豊富で、口の端から溢れ出すほどだ。

アモルは今日一週間分の買い物に来ていた。こつ見えても結構稼いでいたりするが、食べ物にはあまり興味がない。

稼ぎの大半は水に消えていく。

アモルは決して刀で彫るわけではない。

使うのは水。ペンのようなものに水を入れ、先から高速で出す。循環するようになっていたため少しの水でも長くもつ。

昔の知り合いが作ってくれたものだ。

出力を上げれば刀身が出てきて、包丁にもなるスグレモノ。

それにも彫るのに相性があるようで、各地から湧き水や雪解け水などを取り寄せている。

しかし水で彫る人の話など聞いたことがないので、苦労している。

買い物をし終えて、現在帰り道。

大きな袋を持つと小柄なアモルは隠れてしまう。

それにしても、いい天気だ。

日差しに心が和み、早く帰って午睡だと決意する。が、それはすぐに不可能になった。

「やめて！は、放してください！」

あーあ、真っ昼間からろくでもない奴もいるのか。

女の子にはご愁傷様だけど。

自分が出て行ってどうなるものでもない。

自分の非力さは自覚している。

そして助ける義理もない。

路地裏から聞こえる声を無視して通り過ぎようとする。

「あー！アモル！助けて！」

それは無理だつて。…って今の幻聴？

恐る恐る目を向けると、最近見た顔が三人の男に絡まれていた。

「アモル！アモルッ！！」

レイチエルの声に反応して男たちが振り向く。

「んだよ、ガキじゃねーか。嬢ちゃん、おじさんたちと一緒にいいところこう」

それでも泣き叫ぶレイチエルの口をふさぎ、下卑た笑いをアモルに向けた。

「このガキもつれてくか。よく見たら女みてーな顔してるし楽しめんだろ」

うわ、最悪の事態だ。

1 見捨てる…と追いかけて来るだろう。

2 戦う…のは無理。

万事休す。

ここは大人しくするしかない。

なんでこんなことに。

いつもならこんな状況になる前になんとか避けられるのに。

せめて…男たちの名前さえ知っていれば…。

アモルは男に大人しく捕まえられてしまった。

その6

連れてこられたのはどこかの建物の地下らしい。目隠しをして抱えられていたので推測でしかないが。

何でこんな目に、と思っても、巻き込んだ本人は気絶してしまっている。

美しい金の髪が顔にかかっている。

華奢なピンヒールは片方ない。

薄桃色のドレスはこの間より質が劣るものの、街で見かける代物では決してない。

これで私の五年分はまかなえるかも。

思わずため息が出た。

眠り姫には起きてもらわなければ。

王子様ではないけれど。

体を揺すると、少しずつ意識が戻ってきたようだ。

「ん…アモル？」完全に覚醒した目でこちらを見ると、涙をためて抱きついてきた。

「ああ、アモル！怖かったわ！」

肩にじんわりにじむ涙が温かい。

向こうの方が年も上だし、身長も高いので幾分押し倒され気味である。

その後、再び周りをみたレイチエルは泣き出し、なだめるのに小一時間かった。

周りには同じように泣いている女たちが大勢いた。

幹旋業者だ。奴隷か娼館か、どちらにしても質が悪い。

「で、あなたはなぜあのようなところに？」

「だってどうしても指輪を彫ってもらいたくって」

「まさか一人で？」

ええ、と微笑みながらうなづいたレイチエル。

自分の立場もわきまえず、のほほんと笑っている。聞けばその服も変装なのだという。

どこが変装だ。

だが、アモルはレイチエルを見て思う。

むしろ、そう、むしろこの人の美しさは他人を考えないからこそなのか。無垢な赤ん坊のような。

国の王妃にはふさわしいとは言えないが、レイチエルを非難するほどアモルは優しくない。

それよりも。こんなどうでもいいことを考えている場合ではない。

この状況はまずすぎる。

貴族の娘であるレイチエルは搜索されているだろうが、ここはなかなか見つからないはず。

逃げる方法もないことはないんだが、どうしようもなくなったときの最終手段に残しておきたい。

どうしようかとうんうんうなっていると、誰かが入ってきた。

足音はアモルの目の前で止まった。

顔を上げると自分に抱きついたままのレイチエルを見下ろしている目とかち合う。

どこかで見たことがあるような。

…思い出した。

クイルズ商会の跡取り、ハーレー・クイルズ。
昔こいつの婚約者が依頼に来たことがあった。
結局破棄になったので彫らなかったが、名前は覚えていた。

裏はクイルズ商会か？いや、もっと上がいるんだろう。現場監督ってとこかな。

「けっこうな上玉だな。っと、何でガキがここにいる？」

「女みてーな顔してるんで、男娼にでもしちまおうかと」
興味もなさそうにアモルを一瞥すると、震えるレイチェルの腕をとった。

「売り払うのはもったいない。可愛がってやろう」
薄い唇をゆがませる。

レイチェルはアモルの腕に抱きつき離れようとしなかった。
邪魔だ、とハーレーはアモルを蹴り上げた。

まともに腹に入るブーツ。少し浮かぶ体。
ぐつ、と呻くのを満足そうに見やると、レイチェルを捕まえて違う部屋へと行こうとする。わずかな抵抗感。

「何している」
それでもアモルの腕を放さないレイチェルを見て、不機嫌な顔をした。

腹を押さえて縮こまっているアモルの手を踏んでいく。
アモルが呻くのを見て笑う。

レイチェルはハーレーに強引に抱えられたため腕を放してしまった。
それでもアモルからは目を離さず。
見知らぬ男にさわられる嫌悪感よりも、アモルが蹴られたことが衝撃だった。小さな体が縮こまっている。

アモルは痛みに耐えているのか小さく動く。「アモル！」ごめんなさいと、そう言いたかった。

あんなに蹴られて、小さな体が心配でしろうがなかった。今すぐ駆け寄りたい。

しかしハーレーに抱えられ、後ろを向かされると、扉が迫ってきた。連れて行かれた先には何が待っているのか。

恐怖で鳥肌が立った。

その7

ああ、もう駄目、と目をつむる。

その時、なにが起こったのか分からなかった。膝と手の痛み。冷たい地面に直にふれていた。落とされたのか。

ハーレーの手はすでに離れていて、上を見上げるとハーレーは男たちの方を見ていた。

一体なにが起こったの？

「お前ら、女たちを外に出せ」

さつきとは一変するハーレーに驚いて声を上げる。

「はい？なに言ってるんですか」

「大切な商品ですぜ」

部屋にいた男が目を開いて抗議している。

レイチエルはその隙にアモルのそばへ駆け寄った。

「アモル…」大丈夫？、と言う言葉は飲み込んだ。

座り込んだアモルは首から下げた何かを握っていた。隣にいるレイチエルをみようともしない。

話しかけるのはおるか、近づくのさえ許されない雰囲気があった。

「何度も言わせるな」

「え？」

いきなり言葉を発したアモル。

同時に向こう側から同じ言葉が聞こえる。

『女たちを外へ出せ。なんだ？逆らうのか』

アモルのつぶやきとハーレーの声がレイチエルには同時に聞こえた。しかし他には誰もアモルに気がつく者はいない。

ハーレーの言葉を受け、ぶるぶると首を横に振ると男たちは捕まえられていた女たちを運び出した。

ぶつぶつ文句を言いながら動く男たちと、不安そうな顔の女たち。

やがて部屋に女が数人しかいなくなったところで、上の階から悲鳴と怒声が聞こえた。

大勢で降りてくる足音が聞こえる。

誰だ、敵か味方か。

痛みに朦朧とする思考の中で、考えても分からないことに首を振ると、アモルは小さくつぶやいた。

「気絶しろ」

目の端でハーレーの体が崩れ落ちたのが見えた。

扉が開く。入ってきたのは甲冑を身につけた騎士たち。

瞬く間に大人数で部屋を占拠した。外に運び出されようとしていたレイチエルを見つけると、そのうちの一人が男に剣を向けレイチエルに駆け寄った。それはアモルを殺すような眼差しで睨んだあの騎士だった。

レイチエル様お気を確かに、と言い、ぐったりしているレイチエルを丁寧に運び出している。

頭にもかがかかっているままぼーっとそれを眺めていたら、首筋に冷たい感触があった。

いつの間にか周りを取り囲まれ、そのすべてに剣を向けられていた。首の皮一枚、少しでも動くと切れてしまう。

それだけでなく、腹と手の痛みが体力を奪うのだから勘弁して。

考えることを拒否した脳が視界をゆっくりと黒く染めていった。

その8

体中の痛みで目が覚めた。

頭、いたい。

全身ばきばき。

左頬に冷たく固い地面が当たっている。

起き上がろうとすると、手の甲が痛む。

なんとか上半身を起こすと、鉄格子が目に入った。

鉄格子？部屋のインテリアに鉄格子をチョイスするほどマニアックな趣味はない。

家ではない、となると何処だろう？

しばし惚ける。

「――」着ていたシャツをめくると腹には大きな痣。赤紫から青紫へのグラデーションがなんともグロテスクで。

蹴られたことを思い出すと、とたんに痛み出す。ついでに何があったのかも思い出した。

思い出さなければ良かった…。

現実逃避は程々にして、現状を把握しなければならない。

窓はない、時間が分からない。

そもそもここが何処だか分からない。

大きなため息をつく。

そういえば、と思い出した。

首にかけていた銀のネックレス。

プレートにはハーレー・クイルズのスペル。顔をしかめた。
あんな奴の名前が彫ってあるもの、いくら自分が作ったからと言っても気持ち悪い。

どうにか無効にしたいけど……。自分のしたことがどれだけ重いかわかってる。

あれは緊急事態だったと自分を慰める。

「しょうがないって。うん」

「何がだ」

独り言に答える声がしたので、自然と顔があがる。

うわ、あのときの。

レイチエルと一緒にいた騎士が立っていた。

しかめ面を隠すために思わず下を向くと、髪を引っ張られる。

「つつ」

「答える。なぜあそこにいた」

おまえのこのオヒメサマのせいだ！と言いたかったが頭と腹の痛みで口も開けない。

「答える！」

髪を引っ張られたまま肩に足が置かれる。声も出ず吐息ばかりが漏れる。

髪から手が離され反動で仰向けに倒れる。肩においた足はそのままです。

歯を食いしばる。

肩にどんどん重みがかかっていく。全身の痛みと疲労でまた気を失うかもしれない。無様な姿をさらすのは嫌だ。

「ジョイナス、お止めなさい！」

肩を踏みつけていた重みが消えた。

「わたくしの命の恩人になんてことを。アモル、しっかりして！」

「レイチエル様、このような汚いところに来ては」

きつとレイチエルは騎士、ジョイナスを睨みつける。ジョイナスは動揺した。

「アモルを上へ。わたくしの部屋に運びなさい」

後ろに従えていた侍女と騎士に命令する。

「お待ちください、この者は怪しすぎます」レイチエルはジョイナスの言葉を無視し、騎士に抱えられたアモルに近寄る。

「ごめんなさい、ごめんなさい…」幼女のようにそれしか言わない。アモルはレイチエルの声に苦笑いをする。

とにかく疲れた。今は眠りたい。

その9

彼は月を見ていた。

月の雫と形容されることもある自分の体。

月の雫など恥ずかしい名前、最初に言い出した奴の喉を噛み切つてやりたい。

ふざけて言つた奴を昔半殺しにしたこともある。

貴賓室から抜け出てきた彼の姿を見咎める者はなく庭園に一人たたずんでいた。

嚴重に鍵がかかってあつたその部屋を抜け出すのはたやすく、あれで閉じこめているつもりなのかと背後の城をあざ笑う。

もう少しの間閉じこめられておいてやろうか。大々的な祝賀まではと国で一番威張つた男に言われたので、まあいいかと思いつつと城にいた。

この世は彼にはつまらなすぎて、祝賀とやらが暇つぶしになればいい。

そつと庭園をあとにした。

その10

「いつつ!!」

腹を押さえる手から身を擦ってにげようとする。

「動かないでね」につこり笑って元に戻された。

白いベッドに寝転んだアモルをのぞき込んでくる美女。

妖艶が相応しい。ここ最近美形に絡むのが多い気がする。

そういえばあのジョイナスって騎士もきれいな顔をしていた。問題は性格か。

内蔵が傷を負っていないか確かめる、だそうだ。詳しいことは医者でもないアモルには分からない。

あの後、なんとか気を失わず騎士に抱えられたまま地下を後にした。やはり、というか、レイチエルとジョイナスが出てきた時点で予想はついていた。

アモルが住む王都の中心にそびえ立つ王城。

もしかしなくても、アモルは罪人の牢屋兼拷問部屋らしきところに入れられたらしい。

レイチエルの登場でなんとか抜け出せたが。

向かった先はレイチエルの部屋ではなく、医務室。

ベッドに横にされ、出てきたのは何とも言えない美女。

先生、白衣のボタンが弾けそうです。

わざわざ閉めなくてもいいボタンをあえて閉めることによりさらに

強調された胸。同性なのにくらくらしそう。

美女は来るなり「まあ、可愛い患者さん」と言っ、アモルのそばに向かってきて、頭を抱えた。

く、くるしい！

胸で窒息死なんてしゃれにならない。

思いきり腕を突っぱねて離れる。

あら、とにつこり笑ってアモルを連れてきてくれた騎士に向かった。

「治療よ。さあ早く出ていけ」

背中を見ていたアモルには分からない。なぜ彼が青くなったのか。走り去っていったのか。

世の中には知らなくてもいいことがあるんだ、きっと。

騎士が出て行くのを確認すると、またベッドの脇に腰を下ろした。

「女の子なのに、こんなぼろぼろになって」

「なんで、まだ体に触ってもいないのに」

少年のような格好をしているアモルは不思議そうに首を傾げる。

「ふふふ。私に抱きしめられて離れようとするなんて、そんな男いないわよ」死んでもいいって言う奴もいるくらいなんだから。まあ、

私は可愛い子しか抱きしめないけどね。

とウインクつきで。

ソーデスカ、と言うしかない。

治療を始めるわよ、と言われ今に至る。

女医、エリーゼには二週間は絶対安静だと言われ、帰りたいと言えば笑顔で

「絶対だーめ」と一言。

逆らってはいけない気がした。

かけられていた奴隷幹旋の一味ではないかという容疑は、レイチェルによって解かれたようだ。

むしろ被害者と言える。

ジョイナスから受けた傷もある。二重の被害者だ。

でもそんなことを言うのは何となく嫌で黙っていたのに、エリーゼは全て知っていた。

「騎士が女の子に暴力なんて。久々に愛の鞭でも入れてあげようかしら」

エリーゼのことで知ったことがある。

彼女は今でこそ女医をしているが、昔は近衛騎士の副隊長。

敵をばっさばっさとなぎ倒していく姿はまさに戦乙女。

聞いたときには驚いた反面納得した気がする。

うらやましいと思った。非力なこの体と取り替えてほしいくらい。

ジョイナスがどうなろうとどうでもいいが、復讐に來られても困る。

でも少しは恨みを晴らしたい、というのも本心。

悩んでいるうちにエリーゼは消えていた。

ま、いつか。

頭をふると、首にかけてある鎖の音が鳴る。

無視できない重みで、思わずため息をつく。

すると鎖をたどって胸元の合わせ目から銀のプレートを引き上げた。

今すぐ捨てたいが、万一このプレートが壊れたりでもしたら。

エリーゼが教えてくれた。

ハーレー・クイルズは、クイルズ商会はお咎めなしだったそうだ。

王子の婚約者の誘拐と考えれば極刑もあり得るが、なにもなかった。後ろが大きいと言うことだろう。

権力者の暗い部分なんかとはもう関わりあいになりたくない。

切実な願いと大きなため息が一つ、医務室に響いた。

その11

踏み出す。ノブに手をかける。

いや、やっぱり。

足を戻してそのまま後退する。

医務室、と書かれた扉の前を行ったり来たりすること数回。

周りはこちらを見ないように、顔を背けて通り過ぎる。あそこにいるのは身分の高い貴族。なおかつ近衛隊長。

じっと見つめる失礼など出来ない。

見ない振りをするのが一番だ。

扉の前にいる近衛隊長はため息をついた。

新人だった時の先輩であるエリーゼの、愛の鞭という名の死刑でぼろぼろになった後、あの子に謝るなら終わりにしてやる、と剣を向けられた。

あのと自分は生と死の境にいた。

答えに悩むまでもなく。

だが、いざ行こうとするとプライドが邪魔をする。大体、初めて会ったときでさえ失礼な奴だった。

身分の低い者なんかに見下されるなんて許されない。

しかし自分が悪いのも分かる。丸腰の相手を犯罪者でもないのに傷つけるのは、騎士としてのプライドに反する。

ジョイナスはとんでもなく悩んでいた。

再び、ノブに手をかける。

そのまま動かない彼は、後ろから来る気配に気づかず。

押されて勢いよく医務室に飛び込んだ。

後ろを殺気立った目で振り向くと、そこにはレイチエルがいた。

殺気はあわてて消した。

「何をなさっているんですか！あなたは！戴冠式まで部屋で大人しくなさるのが王子との約束だったでしょう！」

「だってアモルが心配だったんだもの」

「だってではありません！」

じわりと大きな瞳ににじむ涙。だって、だってと繰り返す。

この姫に勝てた試しがない。

今回も惨敗だ。

「騒がしいわね。怪我人がいるのよ」

死刑執行人、いやエリーゼがこちらを向いて青筋を立てていた。ここが何処だか忘れていた二人はあわてて口をつぐむ。

「アモルちゃんが起きちゃったじゃない」

見ると、ベッドでアモルが上半身を起こしている。寝起きだからかこちらをぼうつと見ている。

包帯だらけの姿に思わず罪悪感があふれた。

まだ幼い少年に怪我をさせた、俺は。

レイチエルはアモルの横に走り寄った。

「アモル、ごめんなさい、ごめんなさい……」涙をハンカチで拭おうともせず、アモルに詫びていた。

「いいんですよ、別に」

アモルは笑顔をレイチエルに向けた。

「その…悪かった」

絞り出した声はなんとか形になった。

アモルはレイチエルに向けたのと同じ笑顔で「いいえ、いいんです」と言う。

罪悪感から逃れたくて出した詫びが、受け入れられることにほっとする。

レイチエルもほっとした様子で、和やかな雰囲気 flowed。

「いいえ、いいわけないでしょう」

硬質の声に、医務室が凍る。

発したのはエリーゼ。

「ジョイナス。あなたはこの顛末にすべての責任があるのよ。ましてこの子は被害者。それをさらに守るべき騎士が傷つけるなんて、恥だと思いなさい」

エリーゼはさらに、レイチエルの目をとらえる。

「そして、レイチエル様。あなたの無鉄砲がすべてを引き起こしたのです。この子が傷を負ったのも、全て、あなたが」

二人は唇をかみしめた。謝って許されて、なかったことにしたかったのが見抜かれた気がした。

レイチエルが走って医務室を出て行く。それをジョイナスが追った。

後に残されたアモルは、息を吐いた。

物凄い緊張感。一言が針のよう。
それでも。

「エリーゼさんは優しいですね」

彼女は優しい。はつきり言ってあげることが彼女の優しさだ。

「ふふっ、まあね」

対してアモルは「いい」と言っただけ。

本心からではない許しが一番ひどいことだと分かってやっている。

責めないことで、レイチエル達に反省の機会すら与えてやらない。

自分の心が狭いことは分かっている。

波風を立てるのが面倒でもあったから。

変えようとは思わない。変えたいとも思わない。ふっと息を吐く。

エリーゼに今はもう一度眠りなさいと言われるのに甘えて、深い眠りに落ちていった。

その12

寝たり起きたりを繰り返し、絶対安静が解けた頃。

アモルはレイチエルにアフタヌーンティーに誘われた。

あの日から何度も謝りに来るレイチエルに、もうどうでもいいとは言えず。

「本当にいいのです」と言えば、なぜか懷かれてしまったようだ。

まずは医務室のボスに行ってもいいかと訪ねるのが先だ。

「あの、レイチエル様に庭園でお茶会をしようと誘われたのですが」ボスの権限で断ってくれ、と期待を込めてみる。

怪我が治ってきた以上、断る理由がないのだ。でも、貴族の娘さんとウフフフフなんてできない。

期待は空しく、

「行ってきたいいわよ」と言われる。

「でも服もないですし」

アモルはずっと患者服を来ていた。毎日きれいな物が渡されるし、前着ていた自分の普段着より質がいいって…。

複雑な気分で見下ろす。

「あら、もちろん手配するわ」

差し出されたのはきれいな水色。手に取り広げると、ドレス。

誰が着るの？

「女の子なんだから、ドレスの一枚や二枚」自分が着ている様子を

想像してみる。

…うわ。

青ざめたアモルを見てエリーゼはクスクス笑う。

「冗談よ。ちゃんと用意してあるから」

代わりに渡されたのは白のブラウスに黒い乗馬パンツ。

む。レースひらひら。

城で見かける貴族や官吏は同じようなブラウスを着ていたから変ではないのだろう。

機嫌を損ねるとどうなるか分からないので、妥協した。

「今から着替えますので」

出て行つて欲しいな。暗に告げる。

なのに頬杖をつきながら笑顔でこっちを見ている。

「女同士だからいいじゃない」

この人に何を言っても無駄だと二週間で学習したアモルは急いで着替える。

「あら、胸意外とあるのね。アモルちゃんは着やせするタイプなのね」

ブラウスの上から思わず隠す。

顔が熱い。

胸なんて、大きめだとは分かっていたけど気にしたこともなかった。脂肪の塊だから飢え死にしそうになったら役立つかもくらいだった。他人に指摘されるとハズカシイ。

とにかく鏡の前に立つ。

胸は目立たない。着やせするタイプでよかった。しかし、そこにいるのは紛れもなく少女だった。

「あら、可愛らしい。食べちゃいたい」
とりあえずスルー。

首の部分に結ばれたリボンも、袖口から見えるレースも。

「素材は悪くない。可愛らしい格好をしたらもつと女の子に見えるわ」

素材は確かに悪くはないと思う。客観的に見ても。
ただ今は少女らしくする気はない。

むしろ困る。

しかし人は案外見た目で判断しているものではない。五感を使っている。

だから表情、仕草などがその人を形作っている部分は大きい。
髪を皮紐で無造作にくくる。

前髪をかきあげ、首のリボンは外す。

「わあ、顔は変わってないのにかっこよく見えるー」
ぱちぱちと手をたたくエリーゼ。

「まあ、可愛らしいの方が強いけどね」
それはしょうがない。

その13

「わたくし、兄弟がほしかったんです。特に可愛らしい弟が」

花咲き乱れる庭園でなお美しい女性が微笑む。噴水の上に立つ女神の像の化身のよう。

「わたくしをお姉さんだと思ってくださいな」

苦笑いではい、と答える。くださいな、だと拒否権はない。でも姉だったら疲れる。

アモルには聞かなければいけないことがあった。

「あの、レイチエル様。あの時のこと、覚えていますか」

そばにいたレイチエルは不審に思ったはずだ。

アモルの様子とハーレーの行動に。

返事は聞かない。

「忘れてください」こちらも拒否権はないのだ。

ティーカップをかき混ぜていたスプーンが止まる。

「わかりました。可愛い弟のお願いですもの」

うわあ、弟決定なのか。もう、完璧に性別が間違われていることなど忘れてくれるならどうでもいいが。

「忘れますから代わりにこれ、彫ってくださいる？」

差し出されたのはあの時の指輪。まだ諦めていなかったのか。しかし好都合。貸し借りなしだ。

「無償でやらせていただきます」

ハンカチにくるみ、丁寧に受け取った。

「戴冠式は三日後だから、それまでに間に合うかしら」

「おそらくは」

「おや、花嫁は密会中かな」

揶揄するような声が背後からした。

驚いて振り向くと、貴公子がやってきて、レイチエルの肩を後ろから抱く。

思わず目を背けた。

目線の先にはこれまた同様に目を逸らしていたらしいジョイナス。

思わず目があってしまった。

と思っただけで目をそらされた。

別にいいけど。

「ところでレイチエル。彼は？」

訪ねられると嬉しそうにレイチエルは口を開く。

「アモルといっていますの。わたくしの弟ですわ」

貴公子はアモルに笑顔を向けてきた。

手を差し出されたので握手をする。

「よろしく。そしてレイチエルのわがままにつきあってくれてありがとう」

美男子の美しい微笑みに目に毒だと思う。人並みの審美眼が思わずみとれる。

全く笑っていない目と、握りつぶされそうな手がなければ。

レイチエルとこんなに親しい、となればこの人は。

骨が。今ミシッと鳴った、ぜったい。

つないだ手（なんていうと甘く聞こえるかも）の上に第三者の手が乗せられると、ようやく離れていった。

ジョイナスを見上げると、再び顔を逸らされた。
とりあえず軽く頭だけは下げておく。借りを作るのは嫌だけど。

赤くなつた手を後ろで隠す。

どうやら敵認識されたらしい。ちよつと話してただけじゃないか。
この王子ありえない。度量が狭すぎる。知らないとはいえ同性なんだから手は出せる訳ないし、男だったとしても手は出したくない。

アモルの内心など完璧に無視した二人は別世界を作り上げていた。

「あまり私を嫉妬させないでくれ」

「もつ、あなただけよ」

このスコーン美味しい。隣に添えられているのはクリームと何のジヤムだろう。甘さは控えめで酸味が効いている。

ちなみに会話は右から左へ流れていく。

愛の小劇場なんて見たくないもんだ。

「君を迎えに来たんだ。三日後の打ち合わせをしようと思ってね」

「打ち合わせ？あ！もしかしてアリオン様のこと？むっ」

む？

見るとレイチエルは口を押さえられていた。

「レイチエル！」

「う、ごめんなさい」

このうるうる目に王子は落ちたのか。

さっきまで怒っていた顔が一変している。

目尻も眉も下がって、正直あまり格好良く見えなくなっている。しまりのない顔だ。結局、レイチエルと王子、それにジョナサンはあわただしく帰って行った。

アフタヌーンティーセットは瞬く間に片づけられ、アモルは一人で

医務室に帰って行った。

その14

二つ並んだ指輪。

赤い宝石のちりばめられたそれらは大きいのと小さいの。

横には水の入ったコップ。便宜上『彫刻刀』と呼んでいる、ペンの形をした物の『柄』を持ち水を入れていく。

すでに何度か失敗はしているが、再度チャレンジ。

とんでもなく分厚いレンズを入れたメガネで指輪をのぞき込む。

内側にゆっくりと刃を近づけていく。

刃が当たる。そのまま流れるように線を描く。

うーん。やっぱり彫れない。

水が悪いのだろうか。

風が窓から入り込み、頭をなでるカーテン。

外はすでに暗く、月が天の中心にあった。ふと、レイチエルとお茶をした庭園を思い出す。

あそこにも水があったな。

女神が見守る噴水の水なら、もしかしたら。期限が迫っているのでためらってはられない。

素早く患者服からエリーゼにもらった服に着替える。

庭園までどの道が一番人目に付かないだろう。

考え込みながら噴水の位置を確かめるため窓をのぞき込む。

庭園のちょうど中心部。

ここからでも水が光って見える。

水瓶を持つ女神像の横顔を眺めていた。

すると、その後ろから銀色に光るものが見えた。

水しぶきの向こう側、きらきら光るそれに誘われるかのように。

アモルは医務室を後にした。

その15

小さな彫刻刀を胸の前で握りしめる。

アモルは庭園の花が咲き乱れる小道を通り、女神像へと向かった。

銀色の何か。月の光に反射して、かがやくもの。

アモルはふらふらと噴水に近づいていく。

女神像をぐるりと一周。

何もない。

なぜだかものすごく悲しくなった。体の奥がきゅうつと締め付けられる。

噴水の縁に座り、何とはなしに水に映る月をすくう。

彫刻刀にそのまま注いでいった。

彼は突然現れた部外者をじっと観察していた。

ふらふらと歩いてきたかと思うと、がっかりしたような顔をし、つらそうな顔をしたそれ。何がそんなつらそうな顔をさせている？

その後何をするかと思えば水をすくっていた。

おかしい奴だ。水をすくった後は細いへりに器用に寝転がっている。

どんな奴か見てみたい。久しぶりにわき上がる興味。ずっと昔に消

えたと思っていたが、こんな気持ちがまだあったのか。

落ちていた小枝をわざと踏んで音を出す。小さく乾いた音がした。驚いて上半身を起こした目が合う。

叫んで逃げるか？

今まで彼が姿を見せたことのある者は、そういった反応をするのも多かった。

彼らより小さな体の持ち主なら、気を失うんじゃないか。

しかし彼の予想は裏切られる。

たつぷりと見つめ合うと、そのまま両の目から落ちる水。固まったまま涙を流している。

誰とも違った反応。

さらに、その口が小さく開いたときに、自分の血が凍り、熱く沸騰した気がした。

その16

月をみようとアモルは寝ころんだ。

水の粒が顔にかかる。

天の中心から傾いた月に、手が届きそうな気がする。

パキとどこからか音がした。

誰か来たのか？ふと自分の状態に気づく。

誰もいない庭園で寝ころんでいたら、不審者決定じゃないか。不審者ならまだいい。もし再び容疑でもかけられたら…。

肩の痛みを思い出し、青くなつた顔であわてて起きあがつた。

音がした方に顔を向ける。

アモルは自分の目を疑った。

木の影からゆつたり現れたのは銀色。

いや、銀の狼。

月に照らされる毛が発光しているかのようで。一本一本が輝いている。

声にならない。さっきとはまた違う、心臓が揺さぶられる感覚。

アルファスの章。かのアルファスが世界を憂い、自らの命を絶つた後、亡骸から人の姿をした女神、獣の姿をした男神、種が生まれた。

昔の知り合いの囁れた声を思い出す。

何度もねだった昔語り。

男神は白銀の毛をなびかせる。

特に美しい獣の姿をした男神のところはお気に入り、覚えてしま
うほど何度も。

月の光。白銀の獣。

夢にまで見たことがある姿。

なんて美しい。

頬を流れる熱い滴に違和感を感じた。

呼吸をするように、いとも簡単に涙が出た。

その男神の名は

その名は

「ア・リッタ・ヤウス・ディエポロ・ダ・カール……」

言い終わる前に獣は、低く唸ると、飛びかかってきた。

草の上に倒れ込む。

自分の体より大きい狼に四肢を押さえ込まれる。

口から牙がのぞく。

どうしてだろう。このまま喰われてもいいと思ってしまった。

抵抗らしい抵抗もせず。静かに目をつむる。

牙が首筋に触れる。

それでもアモルの口は止まらない。最後の名は、

「セナクール」

…いつまでたつても牙は動かない。

そろそろと目を開ける。

牙を首に当てたままの狼と目が合う。

不思議な目の色。様々な色が混ざり合って黒く見えている。

狼はのどの奥を鳴らした。笑っているように聞こえることに驚く。
いきなり牙を戻した。押さえつけられていた重みが離れていく。
もう一度、目が合うとそのまま駆けていった。

すべてが夢の中のような気持ち。

獣がいなくなったにも関わらず、起きあがろうとは思わなかった。
涙の跡を手でこする。

そのまま腕で顔を覆った。

その17

いつまでそうしていたのか。

月が隠れる頃。空がだんだん白み始める。

アモルは庭園の花に囲まれたままうつらうつらとしていた。

「あっ」

突然、顔を覆っていた腕を捕まれる。

「お前、ここで何をしている。夜間は立ち入り禁止区域だ」

ジョイナスは厳しい口調で言った。

アモルは座り込み、ジョイナスに見下ろされている。

まるであの時みたいだ。髪を掴まれた時。

ただ耐えることしかできなかった時。

思い出すと怖くなった。

少し震える。

「どうした」

肩をつかむのはやめて。恐怖しか出てこないから。

「それにその首……」

なんとか言葉を絞り出す。

「申し訳ありませんでした。立ち入り禁止とは知らなかったのです。

あの、肩を放してください」

一気に言々と相手の言葉も聞かず、立ち上がる。

「送って行ってやる」

いいです、と言っても聞いていない。

諦めて強引に引っ張るのに任せた。

抵抗しようものならどんな目に遭わされるか分からないから。

ふと思う。

あの狼の時は、
牙が首にあたっても恐怖すら感じなかったのに。
白銀の獣の王。

女神は人の王、男神は獣の王、種は植物の王になった。

その18

瞼を閉じればいつでも浮かんでくる。

ともすれば氷にも見える白銀。

月の柔らかな光より冷たい。

アモルは首にそつと触れた。

気づかないうちに少しだけ切れていたらしい。鋭利な牙で。

ブラウスの襟が汚れてしまったので気づいた。

それにしても、あの狼は、神話に出てくる獣の王とどのような関係があるのだろうか。

神話は神話。誰も信じているものはいない。

カミサマが世界を生んだなんて信じていたら、同情の眼差しを向けられる。

人間の起源がメガミサマだなんて言ったら、精神病院送りだ。

あの狼は何なんだろう。

たしかに白い狼はいる。しかし生息地はもつと北の方だ。白とはいっても光り輝く訳ないし。

なによりあんなに大きくない。アモルは確かに小柄だが、すつぽりと覆えるほど大きい狼は聞いたことがない。

うーん。世の中にはまだ知られていないものがたくさんあるんだろうか。

瞼を閉じたままで、腕を組み首を傾げるアモルはの前で大きな音がした。

目の前には大きな箱が出現していた。

大きな箱？

「おい」

はあ？と横を向くと、これまた腕を組んだジョイナスが立っていた。開けるって？

促されるまま箱を開ける。やだなあ、蛇とか蛙とかだったら。

アモルの中でジョイナスは嫌がらせ用員だった。

もう恐怖は感じていないが、それでも近くにいられるすら嫌で。

開けるしかない。腹をくくる。

「へ？」

そこにあつたのは丸いケーキ、らしきもの。毒？

美味しそうな莓タルト。毒には見えない。

ジョイナスは莓タルトを箱から取り出すと、どこから取り出したのかナイフとフォーク、それから皿を出した。

丁寧に切り分けていく。

皿に載せられ、フォークも前に置かれる。

「こないだは悪かった。どうか食べてくれないか」

本当に悲しそうな顔をしている。演技か？本心か？

演技だとしたら毒…。

くそう。まだまだ死にたくないのに。

意を決してパクリと一口。普通に美味しい。むしろ普通じゃないくらい美味しい。

「上手いか？城のパティシエに作らせた」

「はい」

嬉しそうな顔をするのはやめてくれ。

美味しいと嫌いの間で地獄を味わった。

その19

ジョイナスはこんなことをしている自分が不思議でしうがなかつた。

ご機嫌とりのような真似、普段だつたら屈辱だ。

罪悪感から始まつたのに、この少年が気になる自分がある。

今朝、明朝の訓練をしようと城内を歩いていると、庭園に不振な影が見えた。

不審者だと思い、剣を携え向かつた先で驚いた。
倒れている人影。

近づくと、レイチエルのお気に入り少年だつた。
顔を覆つた腕をつかみ、起きあがらせようとする。
ぼんやりした顔にはうつすらと涙の跡。

露に濡れている体が少し震えているのに気づく。
寒いのだろうか。声をかけて肩に手をおく。

アモルが少し動いた時に、首筋が見えた。
白く細いそれに赤い跡がついている。
傷跡から血が少し垂れている。

その首は、と言うといきなりアモルは立ち上がった。
こんな状態で一人にする訳にはいかない。

どうしてここにいたのか、何をしていたのか。聞きたいことは山ほどあつたが、なぜか聞けなかつた。

強引に送ると言うのと、引つ張って歩く。
手首も細い。折れそうだ。

再びこの体にしたことが思い出された。
何度謝っても足りないかもしれない。

医務室に無事送り届け、朝の訓練に向かった。
内にあった罪悪感を消してしまいたいというように、かかってくる
部下を打ちのめす。

終わると、まわりは倒れた部下たち。
その中で一番小柄な奴に近づく。
首、はもつと細かった。
手首、ももつと細かった。

ジョイナスが触っていると、後ろから声がした。
「とうとう男色に走っちまったんですか、たいちよー」
ふざけた声が耳障りだ。

「うるさい。そんな訳ないだろう」
副隊長が顔をのぞき込んでくる。
にやにやと笑った顔を邪険に払う。

「だってその触り方、イヤン」
「気持ち悪い」

俺はレイチエル様をずっとお慕いしていたんだ。結ばれたとは思
ってもないが。

あの方が幸せならそれでいい。だから決して男色ではない！

「まあ騎士の中には男色家もいますからね。不思議なことではない
ですよ。隊長素直になったほうが楽です」

俺が男色？冗談。

「小柄な奴の体の細さを確かめたかったただけだ」

「その言い方、エロ」
ぼそつと言われた言葉に顔がひきつる。
まさか俺が？

アモルが頭に浮かぶ。
ああ、あいつが女だったら…？
やばい。そう思う時点で重症だ。

ジョイナスがアモルのことを頑なに男だと思いこむのには理由がある。

男尊女卑の傾向が強いこの時代に、女が一人で仕事をするのはあり得ない。

それに格好も格好だ。あれじゃ少年にしか見えない。
さらに、貴族やその従者にはもつときれいな顔で、美少女にしか見えない奴もいる。そっちの方が女だと言われても納得ができる。
それに紛れているアモルはやはりただの少年だった。

また、ジョイナスはずっとエリーゼが好きだったため、女とはああいうふわふわして柔らかいものだと思っていた。
アモルはもつと、鋭利な感じがする。

ただ、あの涙の跡がついた顔は、間違いなく少女のもので。
普段は少年らしいのにその落差が。

…落差が何だ。
自分の思考がコントロールできない。俺は何を考えている。
もうあまり考えたくない。

別にあんな少年のことは嫌いなわけではない。むしろ嫌われているだろう。

しかし、そう思うと苦しくなる。

せめて嫌われたくない。

「なあ、嫌われている奴とはどうしたら仲良くなれる?」
「やっぱり言い副隊長はにつこり笑った。

「贈り物とか、どうでしょう」

普通女に贈り物ならばドレス、貴金属。しかし男なのだから、何が
いいのか。

そういえばスコーンを美味そうに食べていた。甘いもの…。

駆けだした俺をみた副隊長がその後すぐ騎士全員に噂を広めたことを
後で知ることになる。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7535j/>

キューピッドの鎖

2011年10月9日19時48分発行